

王朝文学とジェンダー——書く女とその時代

今 関 敏 子

1 はじめに—女性文学の興亡

王朝時代は、女性作家を綺羅星のごとく輩出した。それは世界的見地から瞠目に値する、奇蹟の時代と言える。平安期は無論のこと、南北朝期に至るまで、女性たちは王朝文化において貢献したのである。鎌倉期以降、物語は衰退の傾向を見せるが、和歌・日記というジャンルでは引き続き女性の活躍がめざましかった。仮名日記文学の現存の作品数は平安期より多く、表現も多彩である。^{注1}

平安・鎌倉・南北朝期の王朝の女性たちの多くは、宮廷に仕え、あるいは家を守り、あるいは恋に生き、そして、現代に比べれば制約はあるものの旅もした。^{注2} 人生の喜びも苦悩も存分に味わい、表現し、文字に残した。

しかし、女性文学の隆盛がずっと続いたわけではなかった。南北

朝期を最後に、女性作者たちが文学史から消える。江戸中期の漢詩人・内田桃仙の出現まで約三五〇年間、女性の手になる作品は残されては^{注3}いない。書かなかったのか、あるいは書けなかったのか、書いても残されなかったのか、あるいは自らを抹殺してしまったのか——。ともあれ、女性文学史の空白期を迎えるのである。なぜ、ある時代に女性たちが文学創造者として活躍出来たのか。またなぜ、別の時代には出来なくなったのか。文化・社会・制度という視点から考えてみたい。

2 紀貫之にみる女性原理

I 女性仮託・視点の移動・視角の拡がり—『土佐日記』
仮名日記の最初の作品は、男性作者・紀貫之の女性仮託に始まった。

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。

九三五年頃の成立と推定される『土佐日記』の意表を突く冒頭である。これは文学史上画期的な、革命的と言つてもよい大胆な試みであった。

夙に指摘されているが、『土佐日記』には、対立するものを対照対決させる二元論が見出せる。^{注4}まずは、先に挙げた冒頭の一文に〈男〉と〈女〉、〈漢字〉と〈仮名〉、〈漢文〉と〈仮名文〉が、さらに内容が進むと〈漢詩〉と〈和歌〉が対置される。そして、対峙させるばかりではなく、統合していくのが『土佐日記』の記述の特質である。^{注5}

当時、漢字は「真名」であり、「仮名」に優越した。また、漢字は、男手・男文字、仮名は女手・女文字と呼ばれ、漢字には男性性が、仮名には女性性が付与されている。すなわち、〈男性・漢字・漢詩・漢文〉は、〈女性・仮名・和歌・仮名文〉の優位にある、という価値観が、当時の文化体系に潜在していた。さればこそ、「男性が漢文で記す日記を、女性が仮名で書いてみる」試みは実に新しい転換だったのである。

『土佐日記』には、任果てて土佐から都へ帰る男性官人（貫之自身がモデルである）の船旅が、第三者である女性の眼で綴られている。船旅には船旅独特の困難さがある。まず、陸路以上に日程が予

測し難い。天候により停泊を余儀なくされる。海上では自由に外出は出来ない。海賊に襲われる危険性もある。そして退屈でもある。船中の顔ぶれは、いつも同じである。航海は楫取次第、その気まぐれと横暴さに人々はなす術もなく忍従する。旅の船はいわば閉塞した限界状況である。そこでは、日常的に意味のあったことが無意味になり、権威を示す地位や身分が無効になり、日常的に発揮された能力も役に立たない。また、その逆もある。

どのような時代であれ、社会の中心にいるのは壮年期の男性である。そして、力ある男性であるという現実の自己認識にとどまっている限り、中心の存在としての視角しか持てない。周縁の存在には無関心であり、無関係でいられる。しかし、限界状況と女性仮託は、視点の移動、視野の拡がり、意識の変容をもたらす。それまで隠れていたものの発見を促し、周縁の存在に意味が見出され、老若男女の存在に気づかされる。『土佐日記』の船中には、子どもから老人まで、あらゆる年齢の男女が登場するのが特徴的である。

当時の貫之は壮年期を過ぎ、老いを自覚する時期にあった。廷臣として仕えた宇多上皇、醍醐帝が崩御、親友であった藤原兼輔も世を去り、喪失の悲哀を味わってもいた。もはや力ある中心の存在ではなかった。このことの意味は大きいように思われる。女性視点で描くという着想には、貫之の現実も反映しているであろう。

船は貫之自身、語り手の女性をはじめとする船中の人々は貫之の分身とも読み取れる。老いた男性という現実認識に縛られず、自己の中に老若男女を住まわせていることは、内面の豊かな統合と言えまいか。

『土佐日記』に描かれる船中で、老若男女の交流を媒介するのは和歌である。子どもも老人も女性も男性も喜怒哀楽を和歌に託して表現する。それは共感を呼び、微笑みを誘い、船中の空気を穏やかに調和していく。危険を伴う閉塞状況の中で和歌の果たす役割は大きい。^{注6}

II 言語の自立性と和歌―「古今集仮名序」

貫之の和歌観は夙に「古今集仮名序」に示されている。漢詩文を中心とした唐風文化が隆盛の平安前期（一〇世紀初頭）、『土佐日記』に先んじること約三〇年、勅撰集『古今集』が企画編纂された。それは「やまとことば」による「やまとうた」の正統性を打ち立てようとする熱意ある試みであった。まさしく壮年期にあった貫之は「仮名序」において、和歌の本質と価値を説く。その冒頭を掲げる。

〔A〕やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。〔B〕世の中にある人、こと・わざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの、聞くものにつけて言ひ出せるな

り。〔C〕花に鳴くうぐひす、水に棲むかはづの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。〔D〕力をも入れずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の仲をもやはらげ、たけきもののふの心をもなくさむるは歌なり。^{注7}

「仮名序」の研究史は長いが、これまでの解釈に問題がないわけではない。たとえば、〔C〕は、「花間にさえずる鶯、清流に住む河鹿の声を聞いてください。自然の間に生を営むものにして、どれが歌を詠まないと申せましょうか。」（日本古典文学全集・小学館）のごとく、鶯や河鹿（田で鳴く蛙ではあり得まい）が歌を詠む主体と解されることが多く、ほぼ定説化しているのである。^{注8}

〔C〕をいかに解するかは、和歌の言語認識に関わる重要な問題である。鶯や河鹿を歌を詠む主体と捉えると、「聞けば」が文脈上不自然であるのを否み難い（先に挙げた現代語訳でも「聞いてください」と命令形に意識されている）。「花に鳴くうぐひす」と、「水に棲むかはづ」は、〔B〕の「見るもの、聞くもの」の具体例であろう。「花」「水（清流）」は（見て）美しいもの、「鶯」「河鹿」は美しい声を（聞いて）味わうものであり、歌を詠む人にとつての歌材・対象である。「鶯」「河鹿」が歌を詠む主体なのではない。

伝統的に、和歌に登場する動物が和歌を詠ずることはない。^{注9}人

が、鳥や鹿の声を遠くで聞くか、その存在を想像する表象にとどまる。また、近くで接することも、手を触れて愛でることもないが、動物に感情移入をする傾向が強いのが和歌表現の特徴である。

注意すべきは、鳴き声に人が心情投影をし、音楽的に鑑賞することとはあつても、それを動物の言語表現として感得しているのではない、ということである。貫之は動物の鳴き声と人間の言語を明確に区別し、言語の自立性を強く認識しているのである。鶯や河鹿が人のように意志や感情を表現して鳴く（＝歌を詠む）と貫之が主張しているとは考えにくい。

後代の読者は、あるいは「生きとし生けるもの（＝すべての生き物）」に拘泥しすぎるのかも知れない。と言うのは、数は多くないものの「生きとし生けるもの」には、人に限定される用例（註）も見出されるからである。仮名序（註）の「生きとし生けるもの」も、鶯や河鹿に代表される「すべての生き物」ではなく、「世の中にある人（老若男女）」と捉え得る。人として生まれたからには、自然の美しさに触れて歌を詠まないとすることがあり得ようか、という主張である。

改めて「仮名序」冒頭の私解を示す。

〔A〕和歌は人の心を素材（種）にさまざまなことば（＝言の葉）

となつたものである。〔B〕この世で暮らしている人は、いろいろ

な出来事に会い、すべきことも多いので、それを見るもの聞くものに託して言い表すのである。〔C〕（見るもの聞くものの例である）美しい花に鳴く鶯や澄んだ水に棲む河鹿の声を聞くと、この世に住む人の誰が歌を詠まないでいられようか（詠まずにはいられまい）。〔D〕まったく力も入れずに天地を動かし、姿の見えない鬼神までも感動させ、男女の仲を睦まじくし、猛々しい武人の心まで和らげるのは、和歌である。

Ⅲ 女性原理

貫之は中国の詩論を学びながらも換骨奪胎して独自の和歌観を打ち立てたのである。それは、古代中国の詩論が説く詩の効用と、貫之が説く和歌の効用の相違にも顕著である。

代表的な詩論、『毛詩』「大序」は次のように始まる。

關雎后妃之徳也。風之始也。所以風天下。而正夫婦也。故用之郷人焉、用之邦国焉。風諷也、教也。風以動之、教以化之。

（關雎は后妃の徳について歌っている。文王が世を教化する最初のものである。天下の民を風化し、夫婦の道を正す手だてとなるものである。だから家老たちにこれで教えさせ、諸侯たちにこれで臣下を教えさせたりするのである。風とは諷であり、教えでもある。風諭して人を動かし、それから教戒して人を教

化していくのである。^{註11})

冒頭から説かれるのは詩の実用性、教導性である。少し読み進むと「成孝敬、厚人倫、美教化、移風俗」が見え、啓蒙教化が強調されている。詩というものに道德的・倫理的に風紀を正す教育効果が期待されているのである。「古今集」の「真名序」には「化人倫」の一文があり、中国の詩論の教導の姿勢が継承されていると言い得る。

しかし、「仮名序」においては、和歌は実用性、政治的意図、倫理道德上の教化啓蒙から解放されているのである。このような自由さと、先に述べた言語の自立は相乗効果をもたらすと考え得る。

「仮名序」冒頭の㊦に展開されるのは、中国詩論とはまったく異なる和歌の効用である。たとえば、「大序」の「而正夫婦也。」と「仮名序」の「男女の仲をもちやはらげ」は、まったく対応しない。「大序」は男女の仲を「正す」道德教化の姿勢があり、支配者の意図と政治力強化が読み取れる。一方「仮名序」は男女の仲を「和らげる」のが和歌の効用だと言っている。㊦に展開されるのは「統制」「教導」とは対極的な「平安」と「和合」である。力で支配することなく変化をもたらすもの、平和に柔和に穏やかに融合している世界を生み出すものが和歌だと言うのである。それは言葉の靈力と言ってもよい。ここに内在するのは、すべてを包み込み、許し、調和し、なご

ませる女性原理である。それはまさしく『土佐日記』の船中の老若男女に体现されていると言い得よう。

仮名文字という表現手段と、内在する女性原理は文化的な素地である。和歌・日記・物語の作者として多くの女性の活躍を可能にする文化的土壌は整っていたのであった。

3 「書く」行為の背景と条件

I 制度的背景

「書く」ということ、創造することは主体的・意志的・意欲的な行為である。まずは、資質・才能に恵まれなければ不可能である。無論、それだけでは充分ではない。先に述べた文化的素地に加えて重要な要素は、制度的背景である。

ヴァージニア・ウルフ (WOOLF, Virginia) は『私だけの部屋』(A Room of One's Own: The Hogarth Press, London 1949) で、「女性が小説を書くにすればお金と自分だけの部屋を持たなければならぬ」(…a woman must have money and a room of her own if she is to write fiction…)と述べた¹²。

経済力と自分の居場所を持たなければ、創造的な仕事は出来ないとウルフは言う。これは、何も女性に限らず男性にも通じる、古今

東西の普遍的真理であろう。しかし、ウルフの生きた近代ヨーロッパという背景は、ひとりの女性作家にそのように言わせざるを得ない状況だったのである。

経済的なゆとりがあれば、自由な居場所が手に入り、時間と空間が我がものになり、創造性のある仕事に専念出来る。ただし、それは個人の努力だけで勝ち取れるものではない。制度が許さないことがある。時代の価値観に沿わないことがある。優れた作品が書かれたとしても、それが残るか否かは制度に関わる要素が大きい。

制度には、そこに属する人を一方では守り、一方では縛るという本質的な基本構造がある。一般に女性は経済的、社会的に男性に頼るという形態で、制度的に守られている。しかし、ひとたび自らが目的と意思を持ち、そのための経済と居場所を確保しようとするや、制度は桎梏となる。

歴史を遡れば、制度というものは、力ある壮年期の男性を中心に成り立っていることが圧倒的に多いのである。周縁の存在であり、産む性である女性にとつて、とりわけ結婚制度、婚姻形態のあり方は、人生と生活を大きく左右する。

II 王朝女性たちはなぜ書けたのか

王朝の女性たちは仮名文字を縦横に使いこなして、才能を開花さ

せた。文学の担い手はほとんどが受領階層の娘たちであり、僅かな例外を除いて宮仕えの経験がある。そこは男性女性問わず、さまざまな人々に出会う場であり、貴族社会のサロンの刺激もあった。

婚姻形態は婿取婚であった。妻方に共住みの場合もあるが、多くは通婚で、夫が妻のもとに通ってくる。夫婦が同じ屋根の下に居る時間は短い。家は女性のものであった。社会は男性中心であり、政治は男の仕事であったが、経済は母系社会の流れを汲み、女が握っていた。母権ではないが、女性に財産権があった。

宮廷社会・貴族社会という制度的背景が女性の文化面の活躍を許したと言える。まず、その価値を認める同時代の空気があり、それが後代へ受け継がれ、何世代も享受された結果、作品は古典として残るのである。

ただし、いかなる時代の制度・文化基盤にも矛盾はある。人はその中で喜びも悲哀も味わう。無論、王朝女性たちも例外ではない。家に生きる女性たちにしてもさまざまである。一夫多妻の妻の一人であれば、『蜻蛉日記』の作者・道綱母のように、貴顕の夫・藤原兼家との関係に苦悩することになる。一方、『十六夜日記』を残した阿仏のように、夫・藤原為家亡き後、和歌の家を守る役割を担って意志的に生きる妻もいる。

また、中宮付きの女房である紫式部・清少納言など、サロンのな

場で才能を輝かせた女性作者たちもそれぞれの人生事情は異なる。さらに、王朝時代後半の特徴として、讃岐典侍・弁内侍・中務内侍など、天皇付の女房たちが作品を残す。重責を負う作者たちの眼差からは、中宮や女院に仕える女房の立場とはまた別の宮廷の構造の側面も見えてくる。彼女たちの存在と活躍はもっと注目されてよい。^{注12}

また、豊かな才能や知性は必ずしも幸せを約束するものではない。紫式部のように、学才あるがゆえに生き難さを感じ、人間関係の辛さ、孤独を味わうこともある。『無名草子』には、歌人ではあっても女性は勅撰集の撰者にはなれない無念さが述べられている。

生きる上での葛藤、失意、苦難、挫折はあっても、王朝の女たちは現状に埋没せず、正面から人生と生活を見つめた。洞察力、感性を磨き、表現する自由を手に入れていた。文化的ゆとりと経済基盤は人を支えるのである。

4 〈色好み〉の王朝文学―隆盛から衰退まで―

I 恋と結婚

2―IIIにみたように、実用的な古代中国詩論の教化の方向は、夫妻の、すなわち男女のモラルにまで及ぶのである。対して「仮名序」

における歌の効用は、支配的教化には無縁であり、根源的に「包み込む」世界・女性原理が内在し、女性文化の花開く土壌たり得たと考えられる。

王朝の貴族たちは詩的言語を柔軟に享受した。その文化的自由さは、中国詩論の観点からは、背德的と言い得る方向性をも持ち合わせているのである。

『古今集』をはじめとする勅撰集にも、私撰集、私家集にも、恋の歌のいかに多いことか。恋人たちは和歌を贈答し合ってお互いの胸の内を確かめた。そして、物語や日記においても、恋は王朝文学の主たるテーマであった。王朝時代は女性たちが自らの恋を語る時代であったとも言える。

抑々、王朝時代の女性たちは恋をどのように捉えていたのか。恋と結婚はいかに関連したのか。

『更級日記』には、『蜻蛉日記』のように、夫・橘俊通の言動とそれに対する妻・孝標女の心情が微細に描かれるわけではない。それは両作品の執筆意図が異なるからである。それでも夫の作品への登場場面が少ないことをめぐって、夫婦が信頼と愛情で結ばれていたのか、はたまた互いに無関心で冷ややかなものであったのかは、現代読者の関心を引く。さまざまに取り沙汰される中で、背景として当時の女性の結婚観を論じた後藤祥子の見解はきわめて明解で示唆

のであった。多少長くなるが引用する。

貴顕との恋がまずあって、後半生は東宮・帝王の乳母として權勢を誇る。この順序は重要である。しかるに孝標女の場合、貴顕と巡り合ういとまもないまま、「親たちもいと心得ず、ほどもなく竈め据えつ」ということになった。源氏「空蟬」のいわゆる「身のほどの定まる」悲哀を味わったのである。無論ここで、上達部の家に生れた空蟬が受領の妻になると、もともと受領の女である孝標女が受領の妻になると、その絶望の度合いが同じだといつては不用意である。しかし、受領の娘たちが、最初から身分相応に父兄と同身分の受領との平穩な縁組を至上のものとしたかといえ、そうは思えない材料が多すぎるのである。あえて思い切った言い方をするなら、女たちは東の間の貴顕との恋を夢見、その夢を支える後楯として同階層の男たちを迎えた節がある。決して長続きしない犠牲の大きな恋に身を焼くのは、現代の価値観からすれば誇りや意地がないとの批判があり得ようが、古代の心性として頻出する「思ひ上がる」「心高さ」などの語彙に思い合せる時、それが最大多数の支持を得る価値観であったことを否定するわけにはいかない。むしろそれが中流女性の誇りであり、到達目標であったと読むべきではないか。孝標女の不遇感と悲哀は、彼女にとつて俊通

一人が最初で最後の人であった点に尽きるのであるまいか。^{註13}
とりわけ、恋の相手と結婚相手を同一線上に置かぬ価値観（傍線部）の指摘は、現代の物差しで古典を読む危険性に警鐘を鳴らすという意味でも卓越した見解である。「貞女は二夫にまみえず」「貞女は二夫をならべず」という、古代中国に学ぶ貞操観念が定着するのは近世以降である。また、恋愛の延長線上にその帰結としての結婚がある、恋を矛盾なく一直線に結婚につなげるという道筋は、ロマチックラブ・イデオロギーと呼び得る、これもまた近現代に根強い結婚観である。王朝貴族の価値観とはおおいに異なる。

II 〈色好み〉の理念—制度外の恋

結婚とは制度であり、制約がある。従つて、階層社会においては、きわめて少数の例外を除き、同階層内で成り立ち、親が決める現実であり、結果的に破局を迎えることはあつても、その始まりにおいては続けるべき日常的関係である。

一方、恋は制度に縛られない。制約はない。個と個の問題である。非日常であり、身分の壁を越えられる。秘密の恋、障害の多い間柄こそ情熱的に惹かれ合い、東の間と知りつつ燃える。人生の彩り、豊かな経験として、恋に身を焼くことは、結婚という継続すべき現実とは一線を画す。

制度外の恋でまず想起されるのは、王朝最古の物語『伊勢物語』四く六段に描かれる主人公の男（在原業平がモデルと思われる）と后がねの女性（藤原高子がモデルと思われる）の悲恋であろう。男は築地の崩れを利用して女のもとに通い、盗み出して逃げもしたのだが、ついに女は雲の上の人となる。悲嘆に暮れて男は泣いた。ただし、この場合、事の次第は専ら男の側から描かれており、女の心情はまったくわからない。女は受領の娘ではない。

しかし、『更級日記』のような受領の娘たちの作品には、身分違いの恋、制度外の恋の、異なる様相が見えてくる。身分がさほど高くはない、しかし底辺ではない中流貴族は、実は最も自由で可能性を秘めた立場なのではあるまいか。

言うまでもなく、受領階級の娘たちが一方的に貴顕との恋を望むというのであれば、それは成り立たないのである。貴顕の男性側にも当然受け入れ態勢があつたのである。暗黙のうちに双方の合意があつて、男たちも身分違いの恋を心秘かに歓迎したのである。

未知の魅力をもつ女を思いがけぬところに発見する醍醐味は、『源氏物語』『帚木』雨夜の品定めの中の品・下の品の女へ示す男たちの興味に表象されよう。『和泉式部日記』に展開される「宮」と「女」の関係はその体现であろう。

受領階級の娘たちの結婚観が前提にあるからこそ、制度外の恋の

受容は、決して不自然なことではなかった。さればこそ王朝の〈色好み〉たちは活躍したのである。

III 〈色好み〉の活躍

〈色好み〉という響きは現代ではマイナスでしかないであろう。たとえば人としての信頼性の欠如と評価され、また卑俗な揶揄になり兼ねないだろう。〈色好み〉の心意気は今やすっかり地に落ち、文化的意味は消えたのである。

王朝時代の〈色好み〉が、美的理念であり、しかも反制度としての恋に纏わるものであったことは、その代表的存在・業平や光源氏の人物造型からも明らかであろう。美貌と才覚（とりわけ歌詠みの才は必須条件である）ある魅力的な存在こそが〈色好み〉であり、多情多恨な運命を辿る。そして、男性の場合、どこかで皇統とつながっている。この条件を満たす人物はかなり絞られてくる。

そして、〈色好み〉の男は、果敢に「行動する男」である。状況判断が確かな魅力ある男は、好機を捉え魅力ある女に向つてまず歌を詠みかける。それを待つ〈色好み〉の女は、男を「選ぶ女」である。〈待つ女〉と〈通う男〉という図式は、まさしく王朝の〈色好み〉の基本である。

現代の尺度では、相手が来るのを待つだけとは、自由のない受動

的な在り方にみえよう。しかし、「待つ」のは、「色好み」の女の身上であった。「待つ」からには、制度的な自分の居場所があるのが前提である。現代とはこれまた意味合いの異なる漢語の「処女」とは家に居る女の意であって、その対照語が「遊女」である。「遊」には、一定の所属がないという意味もある。すなわち、王朝時代の「遊女」とは、自分の居場所を持たず、出歩く女であった。舟上にせよ陸路にせよ、移動して芸を売り、春を鬻ぐ女たちであった。従って、旅の途上で出会う存在でもあった。「待つ女」は動かない。

〈待つ女〉には心意気があった。無論、来ぬ恋人を待つて気を揉み、孤閨を託つことがあったにしても、男を通わせる女には誇りがあった。男を選ぶからには、その結果拒むことも当然あり得る。魅力ある女は男にとって手強い女である。この意味で心強さを通す『竹取物語』のヒロイン・かぐや姫は、「色好み」の女の祖であると言い得るのであり、「色好み」として『伊勢物語』に登場する女たちは、その掴み難い魅力ゆえに男を不安にする。^{注18}

また、源平争乱期以降に『建礼門院右京大夫集』を残した建礼門院右京大夫にしても、兩統迭立期に『とはずがたり』を残した後深草院二条にしても、恋に泣き、時代の波に翻弄されながらも自分の人生を生き、それを素材に文学次元に表現し得た〈色好み〉の女たちであったと言える。

IV 女性文学史の空白と〈色好み〉の衰退

しかし、冬の時代が来る。女性たちは書かなくなった。書けなくなった。

南北朝期は日本史上の大きな変革期・変動期であったとする網野善彦の歴史観^{注19}は、女性文学史の空白の始まりに見事に重なる。この点は看過できない。

南北朝期以降、結婚形態は嫁取婚に変容し、男性の家に女性が入るようになると、財産権も失う。父系制が確立していく。女性は、男性の家に依存した生涯を送ることになる。自分だけの場所も、ひとりで采配できる経済も持ち得ない。従属して生きざるを得なければ、志を同じくする者同士が集まるサロンも持ち得ない。南北朝期の仮名日記作品『竹むぎが記』を最後に文学史から女性作者が消える。文化構造も制度も、女性の創造を許さない時代を迎えたのである。

同時に王朝的〈色好み〉の時代は終わった。〈待つ女〉と〈通う男〉という図式は成り立たなくなる。その変容の過程を物語る恰好な例に、小町説話の生成がある。

言い寄る男を拒み、死に至らしめる百夜通い説話、自身の孤独な死を語る髑髏説話等を繋ぎ合せれば、ひとりの女の生涯が浮かび上がってくる。才色兼備の小野小町は、その驕慢さゆえ、遊女に堕ち、

果ては物乞いをして行き倒れ、成仏出来ぬ鬻鬻として野晒になっている、と。

もうひとつの象徴的な例として和泉式部の足跡を辿ろう。

『和泉式部日記』の素材は、冷泉天皇の皇子、帥宮敦道親王と和泉式部という、貴顕の宮と受領階層の娘の、身分違いの恋がテーマである。皇統に連なる、魅力ある行動的な男・帥宮とその訪れを待つ和泉式部の、まさしく〈色好み〉の男と女の恋の成り行きである。しかし、和泉式部像は時代の変遷と共に揺らぎ変容する。

鎌倉期の『宇治拾遺物語』『古今著聞集』に描かれるのは、〈待つ女〉を返上して動き始める和泉式部像である。この時期に既に様々な男を受け入れる、という遊女的性格が付与されている。

南北朝期が終り、室町期に至ると、それは決定的になる。『御伽草子』の「和泉式部」では、選ばず男を受け入れる女・和泉式部が、産まれた我が子を捨て、長じて道命阿闍梨となった息子とそれとは知らずに契りを結ぶ、という筋書きになっている。〈色好み〉の女の何という墮落であろうか。王朝時代に才気縦横に活躍した魅力ある女たちの面影はない。

もはや、自らが筆を執ることはなく、専ら男性側から見られ、男性視点で書かれる対象としてのみ女性存在した。

5 おわりに―女性漢詩人出現の意味

仮名文字の発明がなかったら、また、文学創造の革命児・紀貫之がいなかったら、日本文学の歴史は大きく変わっていたであろう。母系制の流れを汲む社会、それに関連して、婚姻形態、自分だけの居場所の確保など、多くの要素が作用して女性の活躍を可能にした。しかし、それは南北朝期までのことであった。女性の手になる仮名文学の流れは途絶えた。

そして三五〇年にわたる長い沈黙を破って江戸期に登場した内田桃仙は、女性漢詩人であった。才能豊かな桃仙には、父親の庇護があり、自身の書齋も与えられていた。^{注20} ウルフの言う創造者としての条件は整えられていたのである。

仮名文学の復活ではないという意味では、それをそのまま女性文学の復権とは言えないかも知れない。ただし、紫式部・清少納言をはじめとする王朝の女性作家たちにも、豊かで自由な仮名表現の前提として、漢学の素養は必要だったのである。桃仙の出現は男性社会における女性文化の、確たる胎動の兆しと言えよう。この後、江戸期の女性たちが仮名文で物語・紀行文・日記を書き始める。無論、それらは、王朝時代の作品とはまったく質も意味も異なるものでは

あるが、女たちが再び筆を執り始めたことの意義は大きい。

擬古文で書かれる流れは脈々と明治期の樋口一葉へ繋がっていくと捉え得よう。女性作家が活躍し、新しい文学の生まれる魁として、まず、女性漢詩人が世に出たのは必然だったのではあるまいか。

注

(1) 『土佐日記』以降の女性の手になる現存の仮名日記文学作品とおおよその成立年を示せば次のようになる。

平安時代	土佐日記	紀貫之	935頃
	蜻蛉日記	右大将道綱母	974頃
	和泉式部日記		1005頃
	紫式部日記		1008頃
	更級日記	菅原孝標女	1059頃
	讃岐典侍日記	藤原長子	1110頃
鎌倉時代	たまきはる	建春門院中納言	1219頃
	建礼門院右京大夫集		1235頃
	弁内侍日記		1258頃
	うたたね	阿仏尼	1278以前
	十六夜日記	阿仏尼	1281頃

中務内侍日記

1292以前

とはずがたり

後深草院二条

1313頃

南北朝時代

竹むきが記

日野名子

1349頃

(2) 今関敏子『旅する女たち―超越と逸脱の王朝文学―』笠間書院2004

書院2004

(3) 後藤祥子・今関敏子・宮川葉子・平館英子『はじめて学ぶ日本女性文学史』(ミネルヴァ書房2003)の巻末年表参照。

(4) 鈴木知太郎「土佐日記の構成―特に対照的手法について―」

語文第8輯1960・5

(5) (2)の拙著第四章「船旅―紀貫之と女性仮託」

(6) 以上は(5)で論じた。

(7) 引用は『新編国歌大観』(角川書店)に拠り、私に表記し、

論の展開上AとDの記号を付す。

(8) 今関敏子「いづれかうたをよまざりける」考―仮名序作者の言語意識―(日本文学1992・2)で、次の点を指摘

した。『古今集序注』で藤原教長は、人を主体と解している。

しかし、著者の顕昭は歌を詠む主体を「鶯」「蛙」と解釈、仮

名序の長い研究史上、人が主体であるという説は封じ込められ

てきた観がある。

(9) (8)に掲げた拙稿で述べたが、中国詩論(『毛詩正義』

1278以前

1281頃

『文心雕龍』『詩品序』では、詩歌の範囲がきわめて広く、音楽や美術などの芸術表現との境界も曖昧である。この姿勢は動物が詩を詠ずる（＝歌を詠む）という発想に容易に繋がる。『古今集』『真名序』はこれを継承する。貫之は「仮名序」を成すにあたり、中国詩論に学びつつ、言語表現の自立に注目して、独自の歌論を打ち出したのである。

(10) 「生きとし生けるもの」を人に限定する用例には『東大寺諷誦文稿』の「生生世中人、无不蒙父母之恩」、『西鶴織留』の「いきとせ生るもの、子に迷はざるは一人もなし」などがある。

(11) 全釈漢文大系（集英社）の現代語訳に拠る。

(12) 今関敏子『仮名日記文学論―王朝女性たちの時空と自我・その表象―』笠間書院2013

(13) 後藤祥子「平安女歌人の結婚観―私家集を切り口に―」『平安文学の視角―女性―』論集平安文学3・勉誠社1995・10

(14) 『伊勢物語』は、『源氏物語』において「物語の祖」と称される『竹取物語』と並んで、『古今集』に前後して成立した。

(15) 江戸期に入ると遊女たちは遊郭に隔離される。遊女の文化的意味は時代によって変容する。

(16) 今関敏子『色好み』の系譜―女たちのゆくえ（世界思想社1996）で論じた。

(17) (2) の拙著第一章「異次元の旅人―かぐや姫」で論じた。

(18) (16) の拙著に詳しく論じた。因みに411で触れた『伊勢物語』四く六段の后がねの女は〈色好み〉とは言えない。

(19) 網野善彦『無縁・公界・縁』平凡社1978

『日本中世の民衆像―平民と職人―』岩波新書1980

『日本の歴史を読みなおす』ちくま学芸文庫2005

(20) 福島理子「漢詩を作った女たち」(3)に掲げた書の第4章、「近世の女性文学」